

# 丈短く安く 花びらに字

40〜50センチのバラ。長いタイプの半分ほどしかなく、市場では好まれなかった。だが、同じ品質のバラより1本当たりの価格は1000円前後も安い210円。手ごろ感から、特に若い女性の間でヒットしている。

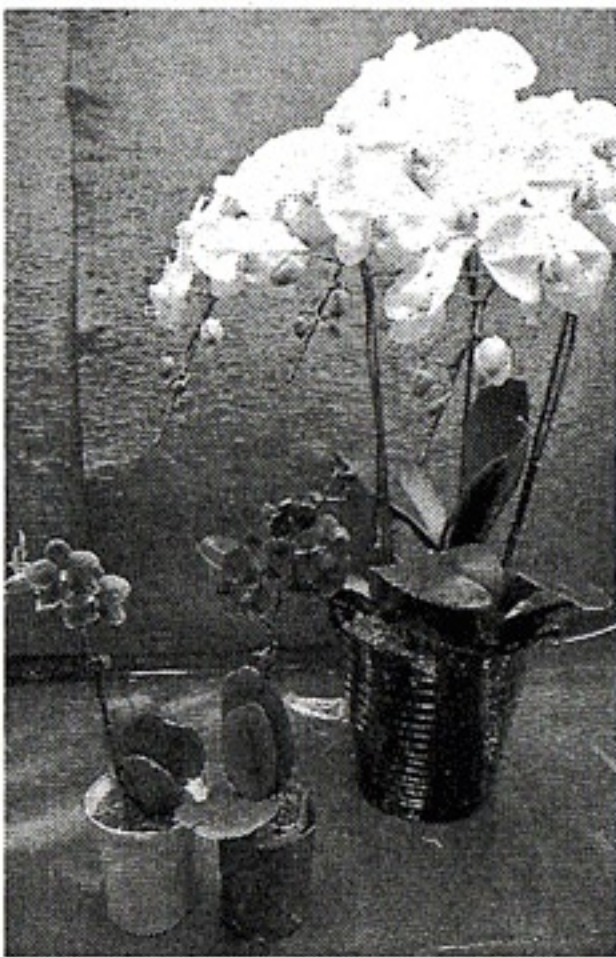
静岡県藤枝市のJAおおいがわと、生花店「青山フラワーマーケット」を全国展開する「パーク・コーポレーション」(東京)が連携し、約7年前に販売を始めた。消費者にバラを気軽に楽しんでもらいたいと思案していた同社に、JAが「短いバラを安定的に安値で売れないか」と相

談して連携が実現した。「ミディアムローズ」と名付け、販売当初は年間数万本の売り上げだったが、今では25〜30万本に急増した。

売り上げ増の背景には「消費者の反応を生産現場に直接採り入れる努力」と同社。シーズン開始前に取引価格を決め、商談や会議には生産農家も加わる。同社の店舗から今後流行しそうな花の色や香りなどの情報が伝えられ、生産農家は栽培の参考にしている。愛知県豊橋市のラン生産会社「リーフ」も、消費者の要望に応じた商品開発に取り組んでいる。今春から本格的に

手がけたのは、コチヨウランの花びらに文字を印刷するサービス。「誕生日」「おめでとう」「寿」など、わずか5センチほどの柔らかな花びらに赤や紫などで印字する。写真や企業のロゴも可能だ。きっかけは「贈り物の花にも驚きが欲しい」という消費者の要望だった。

同社は今、小さなコチヨウランを開発している。高価な贈答用でなく、手土産になる1鉢千円程度の価格を目指している。これも顧客の声を踏まえた開発だ。尾崎幹憲社長は「生産者側の都合だけではもう生き残れない」と話す。



①花びらに文字をあしらったコチヨウラン ②気軽にのみやげ用などに開発された小さめのコチヨウラン(手前)。後ろは通常の商品。いずれも愛知県豊橋市細谷町